
ドロシーの足跡

papiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドロシーの足跡

【Nコード】

N0600W

【作者名】

p a p i k o

【あらすじ】

突然の竜巻に巻き込まれたハルカ。

目を覚ましたら、知らない女と話す猫が…

くオズの魔法使いの世界で呪いをとくことになった少女のお話。

突然の突風だった。

グラウンドに散りじりになったサッカー少年たちは、一瞬目をつぶる。大人たちが何か怒鳴っていた。

「・・・げろ。逃げる！！」

ハルカは、はっと我に返り風の方を見た。

竜巻！！

テレビで見たことはあったけれど、現実に見るとひどい。あらゆるものを巻き上げていくのがよく見えるその上、その竜巻は右に左に揺れながら、グラウンド内に進入してきた。

ハルカは、きびすをかえして建物の方へ走りはじめたが、竜巻のスピードは見た目以上に早かった。

呆然として立ちつくす相手方の選手に竜巻が迫る。

ハルカの体は、その呆然とした少年に突進して突き飛ばした。

そして、自分の体が不意に浮き上がったと思ったら、いっきに何かに引っ張られる感触に意識が吹き飛んだ。

「どうするもなにも、ひろっちまったんだからしょうがないだろ」
「けど、カンザスからだったらどうする？お前さん死ぬかもしれんぜ」

ぶつぶつと誰かが話をしている。

しゃがれた男の声と若々しい女の声。

ハルカは、右足に激痛を感じて飛び起きた。

「おや、お目覚めだね。お譲ちゃん」

声をかけてきたのは、若い女だった。

男の姿はないが、黒猫が暖炉の前に丸くなってくつろいでいる。

「あんた、どこからきたんだい」

「えっと・・・河原町・・・」

そういっても、相手にはわかりそうにない。

なぜなら、女の顔はハリウッド女優みたいな白人の顔で、真っ赤な髪を一つに束ね、チャイナ服のような黒い服を着ている。指にはたくさんの指輪がついている。

普通の大人には絶対見えない、そんな女だった。

「カンザスじゃなくて？」

「カンザス？それはアメリカかどっか外国で、アタシは日本の・・・」

ハルカは途中まで話しかけて、ふと気がついた。

いったいここはどこ？

最初に聞くべきことがらを、ようやく思い出して口にする。

「ウェストエンドよ。といってもわからないんでしょ？」

「わかんない・・・」

「やっぱり、厄介者だぜ、その小娘は」

どこからともなく、男のしゃがれた声がしてハルカはびつくとあたりを見回した。

「ゼロス。いじわる言うんじゃないの。とりあえず、この子を元の国に速やかに戻すことが大事よね」

「そうだ、そうだ。そうするんだな、イーストエンドにいかねえとなんねえぞ」

女は渋い顔をした。

「イーストが快く手をかしてくれればいいけどなあ」

ゼロスはにやりと意地悪く笑った。

「ああ、そうだ。大事なことを聞くの忘れてたわ。あんた名前は？」

「え？ あ、鈴木ハルカです」

「スズキハルカね。アタシはウェスト。あっちの黒猫がゼロス。でスズキハルカはどうやってこの国にきたのかしら？」

「あの、ハルカでいいです。えっと。竜巻に巻き込まれて・・・」

「オズの呪いだあ」

ゼロスは毛を逆立ててそういった。

「オズって、オズの魔法使いのこと？」

「あら、知ってんの。ハルカ」

「ドロシーが主人公のファンタジー小説でしょ？」

ウェストは、額を右手で押さえた。まるで頭痛でも起こしたみたい
に。

「ああ、そうなの。ファンタジーなの・・・」

ウェストは、よろよろとソファーに沈み込んだ。

ちょうど、ハルカと対面になるひとり掛けのソファーに。

「アタシまずいこといった？」

ハルカはなんとなくゼロスに話しかけてみる。

「言ったよ。思い切り、切ないことをさ」

ゼロスは軽く顔を洗うと、むかしむかしと話し始めた。

「カンザスから竜巻にまきこまれた哀れなドロシーは、西の魔女を
その家でつぶしてしまいました。ああ、あわれ、つぶれたところに
東の魔女が現れて、大事な魔女の赤い靴をドロシーにやってしま
いました。どうしてかわかるかい、小娘」

ハルカはわからないと眉をひそめた。

「答えは簡単、二人の魔女はケンカしてたのさ。そこへドロシーが
ふってきた。コレ幸いつぶれた西の魔女の靴を取り上げて、ドロシ
ーにわたし、彼女を新しい魔女とした。でも、ドロシーは帰りたい
という。仕方がないから、オズのことを教えた。黄色いレンガの道
をあるいて、エメラルドシティへ言ってオズという偉大な魔法使い
に相談なさいとやさしい微笑みをうかべたさ。あとは、小娘も知っ

てる通りだろうな。たぶん」

ハルカは、昔ちよっただけ読んだオズの魔法使いを思い出す。

「えっと、脳みそのほしいわらの案山子と、ハートのほしいブリキのきこりと、勇気がほしいライオンといっしょにエメラルドシティで、オズにあったんだよね」

ゼロスは、ヒゲをなでながらうなづく。

「そのとおり、そしてドロシーはオズと一緒に自分の国にかえりましたとき、めでたしめでたし」

めでたいもんかいと小声で嘆き、深いため息をはくウェスト。

「問題はその後でね。エメラルドシティの連中は気が狂ったのか、すべてのものを緑に塗りつぶさなければオズが帰ってこないと騒ぎ出した。小麦が小金に輝いて、収穫されるのを待っているのにそこに火をはなって、人口の芝生を張り始めたのさ。そして、シティとカントリーの戦争が始まった」

ウェストは、立ち上がりお茶を入れた。可愛い花柄のカップをハルカに、丸いお皿をゼロスに、自分は青いカップを手にしてもとのソファーに腰掛ける。

「戦争はすぐに終わったわ。勇気あるライオンのおかげでね」

ウェストは、ゆっくりと紅茶をすすする。

ゼロスが話をついで、語り始める。

「勇気あるライオン、ある意味バカ。というのも、シティとカントリーの代表者に自分をしとめた方がこの世界を好きにすると云ったんさ。そして、シティとカントリーの代表者たちに滅多打ちにされて、死んじまったんだよ。シティとカントリーはライオンの傷を数えて引き分けということにした。シティはすべてを緑にするなんてばかげた話したと気がついたのさ。カントリーだって小麦をシティに売らなきゃ生活ができないってもんだ。つまり、ライオンはただたたき殺されただけってこった」

ハルカは渋い顔をする。

「そんなひどい話ってないじゃない。なんのために勇気もらったのよ。ライオンは！」

だから切ない話なのさとゼロスは皿をなめた。どうやら、ミルクが入っているらしい。

「悲劇はそれで終わらないのよ。ハルカ」

ウェストは、ため息をついた。

「脳をもらった案山子は、何に対してもなぜなぜと聞いてまわるから、農夫たちにうるさがられて最後は焼かれてしまったし、ハートをもらったブリキのきこりは、木がかわいそうだといって仕事をやめてしまったから、シティの人間にスクラップにされてしまったよ」

ああ、せつないねえとウェストはつぶやきながら、また紅茶をすすった。

ハルカは言葉もない。

手の中で揺れている紅茶の赤い色を見つめると、心から切ない気持ち

ちになってきた。

あの物語を楽しんで読んだことが、なんだかとても悪いことのようにも思えてきて、目頭があつくなくてきた。

「なに、泣くことはないさ。小娘。本人たちが望んだからこそ、起こった悲劇だ。それに、今は平和だよ。ただし、ドロシーの教訓から竜巻に乗ってやってきたものは、必ず殺す掟ができたけどな」

ハルカは、流れそうになった涙が引つ込むくらい驚いて、ウェストを見た。

まさか、この紅茶・・・

「大丈夫よ。毒なんかはいつてないから。確かに掟はあるけれど、それはシティとカントリーの掟だから魔女は関係ないの。ただ、あなたが竜巻にのってきたことを魔女以外の人間にばれたら、アウトだけどね」

ハルカは、カップを落としそうになった。
なんてことになったんだろう。

右足がうずく。

この先の不安で痛みがいつそう強くなったようなきがした。
そっと、ひざ掛けをめくってみると、きちんと包帯をまいて手当てがしてあった。

「心配ないわ。そのうち痛みは消えるから。でも・・・」

ウェストは、少し暗い顔をした。

「まあ、足は心配ないよ。問題はこれからどうやってイーストのところへ行くかってことなのよね」

「そんなの、ほうきでひとつとびじゃねえか？」

ゼロスは首をかしげる。

「そうも行かない。とりあえず、車をつかうさ。さあ、旅の支度をしよう」

「俺、車はいやだなあ」

「大丈夫よ。あんたは留守番」

「あっそう」

ゼロスはふんと鼻をならして、丸くなって目をつぶった。

仲悪いのかな？

ハルカは微妙な猫とウエストの関係を疑問に感じた。

ハルカはユニフォームの上から、黒いだぼだぼのワンピースを着せられた。右足は包帯の上から生乾きの靴下をはき、靴はサッカーシューズ。ワンピースが長いから靴が隠れてしまう。

とても歩きにくそうだと思い、スカートのあたりを指でつまんで、ちよつと歩いてみる。

ウエストが言ったように足の痛みはない。

地を踏んでいる感覚が妙に薄い気がしたが、歩けないわけではなさそうなので、ハルカはほつとした。

ウエストは黒いマントを羽織、皮製の小さなカバンを持つと出発するわよとハルカの頭に、ひさしの広い三角帽子をかぶせた。

「じゃあ、いつてくるわ」

「ああ、いつてらっしゃ」

ゼロスはそっけなく見送った。

ウエストの家のまわりは糸杉に囲まれていて、そこを出ると見渡す限り砂だった。

「大丈夫、小さな砂丘だから」

そういつて、ウエストはハルカの手をとると、軽くジャンプした。いつきにスカートが膨れ上がったかとおもうと、あっというまに道に立っていた。

「びっくりした。ここで車を拾うの？」

ハルカは小首をかしげる。舗装されてない道路に、線路のような溝が二本。

なんだろうとしげしげと眺めていると、どこからともなくブリキの馬車がやってきた。

馬も手綱を握っている人もブリキだ。

「案山子のやけ野原までいきたいんだけど」

「やけ野原へはいきませんが、手前の緑の丘ならとおりますよ。マダム」

「そ、じゃあそこまで、二人おねがいね」

ウエストはハルカの手をとって、ブリキの馬車にのせた。

「これ、お尻がいたいね」

「座席までブリキだからね。ちよつとの辛抱よ。たいしたことないわ」

ウエストはカバンから缶を取り出して、飴玉をなめ始めた。ハルカにも瑠璃色の飴をくれた。

味はソーダに近いかな

特別不思議な味ではなかった。

飴をなめているうちに一本の大きな木がたっている小さな丘が見えてきた。

あれが緑の丘よとウエストが教えてくれた。

馬車を降りると、ウエストは丘に背を向けて、脇の道へと歩き始めた。

「案山子の焼け野原って？」

「案山子が焼かれた場所なの。いまでも焼け続けている呪われた場所ってところかしら」

ウエストは少し暗い微笑みを浮かべた。

ハルカはなんとなく黙って、ウエストに従った。

風景は緑一色におもえるほど、麦が実っていた。

けれど、一箇所だけ、丸く真っ黒に焼けた畑があった。野焼きでもしたように、あちこちでぶすぶすと煙が昇っている。

「ここが案山子の焼け野原よ」

「このままにしていもいいの？まだ火があるみたいだよ。消さないのかな？」

消さないのじゃなくて消せないのよとウエストは言った。

「カントリーの連中は案山子の呪いだってアタシたち魔女にのろいをとくように依頼してきたの。でも、誰もこの火をけせなかった。氷と水の魔法でも消えなかった」

ハルカは黒こげた地面をじっと見た。足元から視線を奥へと向けると、何か光るものが見えた。

「ねえ、あれ、なんか光ってるよ。真ん中のところ」

「ああ、たぶん、案山子がオズからもらった脳だと思うわ」

あれがのろいの元凶よとウエストは、ため息をついた。

ハルカは、なんとなくその光るものがきにんなって、気がついたら焼け野原に足を踏み込んでいた。

熱くないな？

サッカーシューズのせいかな、熱さは感じないので少し前に進んでみる。

「驚いた！ハルカはなぜ中に入れるの？熱くないの？」

「うん、大丈夫みたい。あれ、ひろってきてもいい？」

ウエストはちよつとまってといって、カバンから分厚い手袋をだした。

「やけどしないように、耐火手袋していきなさい」

「わかった」

ハルカは慎重に光るモノの側へよっていった。

よく見ると骸骨みたいだ。
ピカピカ光っているのは、金属性なのかもしれない。

「あ、結構大きいな」

ハルカは、髑髏を両手にささげもって、ウエストのほうを振り返った。

驚いたことに、ハルカの歩いた後には緑が生えていた。

なんだ？

不思議に思いながら、できるかぎり早足でウエストのところへ戻っていく。

その間に、髑髏はしわしわと縮み始めた。

ウエストのところにたどり着いたときには、片手の平に乗るほど小さくなってしまった。

バサッ

ハルカの背後で何か音がして、振り返ると焼け野原は緑の麦畑にかわっていた。

「呪いがとけたんだわ」

感嘆するようにウエストはつぶやいた。

ハルカが案山子の呪いをといたあと、ウエストは少し黙って考えていた。

そして、意を決したように言う。

「ハルカ、ライオンの勇気をとりにいきましょう」

「ライオンの勇気」

「そう、シティの北に薄暗い墓地があつてね。誰も近づけないの。そこには勇気をもらったライオンがうめてあるから」

「つまり、ライオンの呪い？」

ウェストはこくりとうなずく。

「もしかしたら、ハルカにならとけるんじゃないかと思うの？ どう？」

「どうっていわれても・・・」

ただの偶然なんじゃないかとハルカは思っていた。

「だめでもともと。ね、やってみようよ」

ウェストは、なんだか子供っぽい顔の笑みを浮かべる。

ハルカは、なりゆきだと思つて、墓には行くことにした。

でも、お墓って・・・あんまりすきじゃないんだよねあ

そう思いながらもハルカはウェストとともに、ブリキの馬車で墓地へ向うことになった。

シティはカントリーと違って、なんだか映画に出てきそうな近未来的な場所だった。

馬車の窓からじっくりと観察してみれば、建物はどうやら六角形らしく、窓やビル同士をつなぐ渡り廊下のようなものも、同じ形をしていた。

「今のシティは通称がビハイブっていうのよ」

「ビハイブ？」

「蜂の巣って意味」

「へ〜。それで、どこもかしこも六角形なんだ」

そんな不思議な町を通り抜けて、とうとう馬車は墓地の近くで二人を降ろした。

墓地は入り口から、既に寂れている。

なんとなくホラー映画の世界を彷彿させる雰囲気で、ハルカの肌はあわ立った。

「や、やっぱやめない？」

「大丈夫よ。アタシがいるから。それにこの国には幽霊はいないわよ」

「へ？」

お墓をつくるのに幽霊がない？

「お墓は世界の記憶だから、誰かが死んだら、勝手に墓ができちゃうの。ここはそういう国。さ、いくわよ」

ウェストは、ハルカをぐいぐい引っ張って、墓地の奥へと歩いていた。

崩れかけた墓石や苔むした雰囲気、ハルカを怖気づかせた。

墓地の中でも一番くらい場所に、大きな六角形のガラスの柱があった。

高さは2メートル弱といったところか。

これよとウェストは何気なく触る。

ハルカもおそろおそろ触ってみたが、何も起きない。

微かに何かが中できらめいているように見えるけれど、透明度の低いガラスでは判然としない。

「割っちゃえば？」

ハルカがやけになってそういうと、ウエストはその辺の石を拾ってガラスにぶつけた。

粉々に砕けたのは石のほうだった。

ハルカは、思わずあとずさったときに、何かの角にけつまずいた。そして、左足がガラスにぶつかる。

ぶつかるよね、普通。

石が砕けさせるほど硬いはずのガラスを、ハルカの足は貫いていた。まるで、ゼリーに指を突っ込んだみたいにガラスは柔らかい。

手で触ったときは確かに硬かったのに。

ハルカはゆっくり足を引き抜いて、ウエストを見上げた。
ウエストはニヤリと笑った。

「要するに、足使えってことよ。ハルカ」

確かにサッカーで鍛えたこの足を使うというのは、悪い話じゃないんだけど。

「なんかぐにゅってするんですけどお」

「四の五の言わないで、ほら」

ウェストに促されて、左足をガラスに突っ込み、真ん中あたりでキラキラしている丸い物体を軽くける。

物体は左足の上ではねた。

これなら、リフティングの要領で引き出せるはず。

ハルカは注意深く足をガラスから引き出した。

足の甲の上に、なにやらメダルらしきものがのっている。

グシャリ

目の前でガラスの塔が砕け散り、地面には半透明のガラスの墓石が出来上がった。

「なんか字が書いてあるけど・・・」

「ああ、ライオンは安らぎの中って書いてあるの」

へえとハルカは感心しながら、メダルを手にした。メダルというより500円玉くらいのコインだ。

眠ったライオンの姿がほってあった。

「すごいわ。これで三つ目もきつととけるわ」

ウェストは、だんだんと子供っぽくなっていく。

最初にあったときの印象とは、何かがずれていたが、ハルカには、それが何か判然としなかった。

案山子の脳を手に入れて、ライオンの勇気を手に入れて、残るはブリキのきこりのハートだとウェストはにこにこしながら言う。

「で？全部手に入ったら、アタシ帰れるの？」

「帰れるよ。かなり確実に時間軸と世界軸を合わせられると思うわ」
「世界軸ってなに？」

「異世界をポイントする道具のこと。アタシやイーストだけじゃ確立が低くなるから、ハルカをハルカの世界に帰せても、時間がずれるかもしれないし、その逆に時間は大丈夫でも微妙に違った世界に帰すことになるかもしれないから」

それって、かなり無謀。

ハルカは眉をしかめる。そんな不確実な方法で、この世界から放り出そうというのだから、魔女というのはやっぱり、親切ではないと思った。

それで、ブリキのきこりがもらったハートはイーストエンドのすぐ近くにあるという。

また、ブリキの馬車に揺られながら、シティからカントリーへと変わる風景。

都会と田舎。

理想と現実。

何か交じり合いそうで、交じり合わない世界が同居しているような奇妙な感覚を、ハルカは覚えた。

「ほら、あれがそうよ」

ウエストの指差すほうに大きな森があった。

まるで、巨大ブロッコリーのようにこんもりと・・・

でも、よく見ると変だった。

木の根元に、何か銀色のモノがのたくっている。

ハルカとウエストが馬車をおりて、森に近づくと、銀色の正体は

っきりしてきた。

茨だ。

ブリキの。

「で、この場合、どうすればいいわけ？」

どこからも森へは、入れそうにない。

「とりあえず、茨を踏んでみたら？」

ウエストののんきな提案に、しかたなくハルカは従った。すると、ハルカの足をよけるように茨は道を開いた。

「いけそうだけど、迷子になりそう」

ハルカがそうつぶやくと、ウエストはカバンから糸巻きを一つ取り出す。

糸の色は青。

「これを、こうすれば、迷子にはならないわ」

そういつて、ハルカの右腕に糸をまいた。

「ウエストはこないの？」

「たぶん、入れないと思うわ。ほら」

ウエストが茨に近づくと、茨はウエストに巻きつこうと弦を伸ばした。

その弦をひょいとかわして、ウエストはほらねと笑った。

「ハートを確保できたら、糸を二回ひっぱるとここにもどってこれるから」

じゃ、いつてらっしゃいとウエストは軽くハルカを送り出した。

ハルカが通るたびにガシャガシャと音を立てながら茨の道は開いていく。

森は暗く夕方のような雰囲気だ。

とにかく、はやくハートをみつけないと。

ハルカは足早に前に進む。

その先に本当にハートがあるか疑問なのだが、行くしかないので進んだ。

10分は歩いただろうか。

茨の道が急に開かなくなった。

そこには、大きな緑色の宝石のようなハートが地面に斜めにめり込んでいた。

これかなとハルカは思い、両手で引っこ抜く。

すると、今度は茨がざわりとハルカにまきつこうとした。

間一髪で逃れて、青い糸を二回引っ張った。

すると、背中から何か大きな力に引っ張られて、気がついたらウエストの前に立っていた。

「お疲れさま。どうだった」

ハルカは言われてハートを差し出そうとしたら、手のひらの大きさまで縮んでいた。

ザーザー

後ろを振り返ると、ブリキの茨は砂になっていた。森には木漏れ日が差し、黄昏時の暗さは微塵もない。

「これで、全部、解けたのかな？」

「ええ、そう。さあ、イーストのところへ行きましょう。今度はハルカをかえさなきゃ」

ウエストは糸巻きとハートをカバンにいれて、かわりに傘をだした。白いフリルのついた黒い日傘のような傘。それをさして、ハルカの右手を握る。

ふわりと体が浮き上がって、ハルカはあわてた。

「大丈夫、歩くように足をうごかせばいいの」

言われた通り、歩くと空を飛んでいるのだけれど、見えない道を歩いているような感覚になった。

「あんまり高くとばないでね」

「あら、ハルカは高いところ嫌い？」

「苦手なの。昔、きのぼりしてて落ちたことあるから・・・」

大丈夫よとウエストは笑った。

空中を歩きながら、ハルカは下を見ないようにした。ウエストは何か鼻歌を歌っていた。

聞き覚えのあるようなないような。
たぶん、オズの魔法使いのテーマソングだったように思うけど、何か違う気もした。

15分くらい飛んでいると、いつのまにか大きな湖が見えてきた。
湖畔に白い大きなログハウスが立っている。

「あれがイーストの家よ」

ウェストはそういいながら、ゆっくりと階段でもおりるかのよう
に降下した。

湖面から30センチくらいのところまでおりると、ログハウスから
人がでてきた。

真っ白なもじやもじやの頭に、黒縁の眼鏡をかけたひよろりとした
男の人。

なんか怪しげな科学者っぽい。西の魔女は女の人じゃなかったけ？
ハルカは不思議に思いながら、にこやかに湖面を歩いてくる、その
男を見つめた。

「やあ、ウェストこんなオチビチャンを弟子にするのかい？」

「弟子じゃないわ。この子、竜巻にのってきちゃったのよ」

「また、冗談を・・・」

男は黒々とした細い目で、じっとハルカをみる。

ハルカはぞっとして帽子で顔を隠したくなった。

「確かに異界の顔だね、で、僕に何をさせたいのかな？」

「この子を元の世界に戻してほしいの」

「魔力がたりないよ。時間軸か世界軸のどちらかが確実に狂うよ」

大丈夫とウエストはいい、カバンをイーストに渡した。
イーストはカバンの中を探って、おやという顔をした。

「のろいがとけたのかい？」

「そう、ハルカがといたわ。だから、帰せるでしょ」

イーストはにやりと笑った。

「やってみるかな」

そういいながら、ハルカの帽子をとって湖面に落とした帽子は見る見るうちに大きな円盤になった。

ウエストがその円盤におりて、ハルカを真ん中に立たせた。それから、ワンピースを脱がせカバンにしまった。ハルカはここへきたときのサッカーのユニフォーム姿になった。

イーストは、カバンから髑髏を取り出した。

それは、左目にライオンの眠るコイン、額に緑にきらめくハートの宝石を埋め込んだ骸骨だった。

「さて、オチビチャン。これをもって」

渡された髑髏を持って、じっとしていると足元の円盤に模様が浮かび上がる。

これって韓国の国旗みたいだ

「ふむ、太極図か、なるほど。これなら確実にもとの世界へもどせるね」

イーストは満足げにウエストと肩をならべた。

「いいかい。オチビチャン。髑髏を抱きしめてできるかぎり鮮明にもとの世界を思い出すんだ」

目をとじてとイーストは言った。とても優しい声で。

ハルカはそつと目を閉じてあのサッカー大会の会場を思い浮かべる。応援に来ていた両親や、友達の間、相手チームの背中や転がるボール……

ハルカが懸命に思い出している間、二人の魔法使いは二極の白い穴と黒い穴の上に立って呪文をとねえる。

すると太極図はミルクをたらした珈琲のようにぐにゃりと渦をまき。中心にはハルカがいて、そこは微かに蒼く光り始めていた。

そして、音もなくハルカの姿は消え去った。

「どうやらうまくいったようだね」

「ええ、でも靴がのこってるわ」

「等価交換だね。たぶん。髑髏はオチビチャンの手の中に残ったんだよ。ドロシー」

ウエストだったはずの女は少女の姿になっていた。にんじん色の髪と小さなそばかす。

「じゃあ、アタシはまた魔女修行を始めないといけないのね。オズ」
「大丈夫、アイテムは使えるから。それにゼロス師匠がなんとかし

てくれるよ」

オズはふふと笑い、白衣に両手を突っ込んだ。
ドロシーはちよつと苦笑いした。

ハルカはいろんな痛みで目が覚めた。家族がいつせいに顔を覗き込んでいる。
なにがどうなったんだっけ？

「ハルカ・・・よかった」
母が半泣きでほつとする。父が頭を軽くなでてくれた。

「アタシ、どうしたの？」

話をきくと、竜巻に巻き込まれて林の中にはじかれたそうだった。発見が早くて、命に別状はなかったけれど、かなり重体だったらしい。意識が戻るのに三日かかったそうだった。

それから、いろいろ脳の検査して異常がないことがわかった。
あとは、怪我を治すために3ヶ月ほど入院しなければならなかった。

そして父は少し言いにくそうに言った。

「ハルカ、お前な。足に大きな怪我をしたんだ。リハビリすれば歩けるようになるが、サッカーを続けられるかわ、わからん」

ハルカはそういわれて、急に涙がこぼれた。

サッカーができなくなるかもしれないことが、自分でも思っていた以上にショックだったらしい。

涙はなかなか止まってくれなかった。

「でも・・・リハビリしたら・・・きっとできるようになるよね」
父も母も難しい顔をしたが、ああきつとな慰めの言葉をくれた。

「ああ、そうだね。ハルカ。あなたコレをにぎりしめてたのよ」

そういつて母が渡してくれたのはあの髑髏だ。それも小さなペンダントになっている。

「大事なものの？」

うなずくと母はペンダントをハルカの首につけた。
きつとよくなるわといって。

三ヶ月間、治療とリハビリをしながら、ハルカは考えた。
アレは夢だったのかなと。

でも、勇気とハートと脳の集合体である不思議な髑髏は、自分の手元に残っている。変わりになくなったものがある。それはお気に入り
のサッカーシューズ。あの日、試合で履いていたものだ。

サッカー本当にできなくなるのかな。

縫合された傷をみて、確かに無理な気がした。

でも、髑髏をなでていると、なんとなくがんばれる気がした。
とにかく今は治療とリハビリに専念しようと、ハルカは決めた。

＜終わり＞

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600w/>

ドロシーの足跡

2011年10月6日16時32分発行